

「主と教会に仕える」

コロサイ 1 : 24-26

堀田修一 25・5・11

I 「今は、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています」。

1. パウロのこの時の獄中生活は、コロサイ人を含む異邦人に伝道する上で当然の苦しみと自覚していた。主に愛され救われたパウロは、主と主のからだである教会（兄弟姉妹）を心から愛していたので、主と教会のために受ける苦しみを喜びとした。その苦しみによって多くの人々が福音の恵みにあずかるとするなら大いなる喜びだった。主のからだである教会を迫害していたパウロに現れた主はこう言われた。「あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです」（使徒9：15、16）。「だれでもわたしについて来たいと思う者なら、自分を捨て、自分の十字架（主について行くが故に受ける主のための苦しみ、主がそれぞれに与えられる苦しみ）を負い、そしてわたしについて来なさい」（マタ16：24）。しかし、常に苦しみの中で、主の大きな恵み、愛があることを忘れてはならない。「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます」（Ⅱテモ3：12）。苦しみの時に神の深い慰めがあり、苦しみは私たちを慰めの人に変える。パウロは慰めの人に変えられた。「神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです」（Ⅱコリント1：4）。※証し。苦しみを味わう前、心からの慰め、共感はできなかった。神の配慮。

2. 真の慰めとは、上から慰めてやろうと多くのことばを並べ立てることではない。それではかえって傷つけ、相手を見じめにさせる。真の慰めの人とは、その人の上にはではなく、傍ら、そばにいる人。慰めの原語の接頭語の意味は、「そばに、傍らに、沿うて」。真の慰めの人とは、苦しむ人のそばに、傍らにいる人、寄り添う人。良かれと思うことを一方的にしゃべる人ではなく、沈黙を受け止め、またその人のことばに耳を傾ける人。その後、もし相手の人が「あなたの経験した苦しみ、慰めの神のことを聞かせてください」と言われたら、分かち合う。そこに慰め主なる聖霊は臨在され働かれる。苦しみには神の深い御目的、意味がある。偶然はない。「苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたのことばを守ります」「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」（詩119：67、71）。※私の実感です！

Ⅱ 「私は、キリストのからだ、すなわち教会のために、自分の身をもって、キリスト（からだ＝教会）の苦しみの欠けたところを満たしているのです」：24。「キリストの苦しみ（この原語は、主の贖罪の苦しみには使われていない）の欠けたところを満たしている」とは？非常に大切な理解！

1. まず、これは、私たちの罪の贖い、償いのための主の十字架の苦しみに欠けがあったので

パウロが補っているという意味では決してない。主の苦しみ、十字架の御わざは完全で、私たちの罪の贖いは完成した。罪の贖いは、罪のないキリスト御自身のみがおできにあることであり、そのわざに、誰も付け加えることはできないし、その必要もない。

2. では、「キリストの（からだである教会の）苦しみの欠けたところを満たしている」とは。主が十字架の苦しみで完成された贖いではなくご聖霊による聖化＝主の姿への成長のために受ける苦しみのこと。キリストの十字架の贖いの苦しみが欠けているという意味では全くない。この苦しみは、主の十字架の御わざの後、主を信じる群れ、キリストのからだである教会、私たちが、主の姿、品性に変えられ霊的に成長するために受ける苦しみのこと。「苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性（主の品性）を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです」（ローマ5：3-4）。主の再臨の日まで、主の姿、品性に成長するためにキリストのからだである教会、私たちは、主の為に光栄な苦しみを受ける。これは主の弟子とされた印の苦しみであり喜び。パウロは、この時も、主に愛され主について行くゆえに受ける苦しみを受けつつ福音を伝え教会を建て上げ続けている。主の真の弟子であるパウロの本音の告白から励まされる！→「ただ、聖霊がどの町でも私に証しして言われるのは、鎖と苦しみが私を待っているということです。けれども、私が自分の走るべき道のりを走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかす任務を全うできるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません」（使徒20：23, 24）。「私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれますが、行き詰まることはありません。迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません」（Ⅱコリント4：8, 9）。※私は、このみことばで励まされています。福音を伝え、主の教会を建て上げ、全国運営委員としてJECAの教会（199教会）に仕えることは苦しみ、使命、労苦（中連合時代からの歴史を知る者として。苦しんでいる教会からの相談、寄り添い、できる分の助け）があり、弱っている教会をお助けする喜びがあります。

Ⅲ「私は、神から委ねられた務めにしたがって、教会に仕える者になりました。あなたがたに神のことばを、すなわち、世々の昔から多くの時代にわたって隠されてきて、今は聖徒たちに明らかにされた奥義を、余すところとなく伝えるためです」：25、26。

1. パウロは、神から委ねられた務めに従い福音を伝え、教会に仕える者となった。※証し。約50年前、阿蘇のキャンプ場で神からの召命。約50年後、今年8月そのキャンプ場で九州地区のご奉仕。神の御計らい。初心に立ち返る宝の時。パウロは、①福音を伝えることと②主の教会に仕え、教会を建て上げることの両方を大切にした。神は、高ぶる人、自分の栄光、自己実現（人を利用しつつ）のために活動主義（神との交わり、人の人格、人との愛のかかわりを大切にしないでイベントに集中する。神との深い交わりや自分を知ること、悔い改めを避け、活動することでごまかして行く）の人を用いられない。神は神と福音と教会を大切に仕える心の人を用いられる。私たちもそうありたい。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる」（ヤコブ4：6）。

2. 「神のことばを余すことなく伝えるためです」。直訳：「神のことばを実現させる、満たすため」。コロサイには、神のことばではなく、間違った教え（異端）のことばが悪影響を与えて

いた。それに対して、真理であり生きている神のことばを伝え満たす。神の言葉、福音には、真の力があり、人々を罪、悪魔、間違った教えから解き放ち、いのちある良い影響を与える。

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。」

1：6。主のからだなる教会として伝える礼拝や祈り会のみことば（メッセージ、宣教）、家庭での礼拝メッセージの分かち合い、個人的に家族知人に伝える神のことば、福音、互いに祈り合い伝える神のことば、福音が神に用いられ御聖霊が働かれて人々の救いと養いとなるように祈りたい。神は、パウロの人格、私たちの人格を用いて人格のある人々の心に福音が伝わるようにされる。

祈り。応答の賛美を捧げましょう。